

## 都立広尾病院 医療事故防止マニュアルがもたらしたものの

たくさんの「当事者」の方たちの話を聞かせていただいて、それぞれの講義が新しい発見の連続であった。特に印象に残っている授業は医療事故の話である。それは自分が都立広尾病院での勤務経験があるからかもしれない。今回の話を聞いて自分が働いていた当時のことを振り返りながら、医療事故とその対策について改めて考えたことについて述べたいと思う。

広尾病院では毎年、院内で行われている医療安全のための講習会に参加することが義務付けられていた。その講習会の内容は、病院で起こった医療事故を振り返り、今後このような事故を起こさないためにはどうすべきかを問われたり、考えさせられるものだった。私はこの講習会の意味を正しく理解しておらず、講習会は面倒なものだという思いしかなかった。

また先輩たちから、“この病院はあの事故からずっと時間が止まったままだ”という話をよく耳にした。「あの事故以来、置いてきぼりにされている病院」、これがそこで働く人たちが持っていた印象だった。

事故の再発防止のために取られた策は多岐にわたり、それらすべてが私たちスタッフに厳重に通達され、私たちはそれを守りながら仕事をしていた。言葉にすれば当然で正しいことのように見えるが、またあのような大きな事故が起こらないようにと、何でもかんでもマニュアル化され、マニュアル通りにしか動けない現状と動かないスタッフ。事故を起こさないようにと過剰な抑制が行われ、必要以上に自由を奪われる患者。それを当たり前のように思い疑問を抱かないスタッフ。

毎日のミーティングで本当に小さなインシデントに対して吊し上げのように追及される日々。インシデントとは、起こってしまった小さなミスが大きな事故に繋がらないようにどうすればよいか対策を考えるためのものだと教わったが、結局は「誰が」「どのような状況で」に重点が置かれ、話し合いの場にいること自体が苦痛であった。そしてそれがさらにスタッフの思考を「事故を起こさないための看護」へと偏らせ、それ以外の看護が置き去りにされている状態であった。たとえそこで行われていることに疑問を持ったとしても、皆が「あの事故があったから仕方がない」と諦めている。

新人であった自分は、何のためにそれらを行わなければならないかが理解できず不満ばかりが溜まり、たくさんの矛盾について考えることを諦めてしまった。

広尾病院で行われていたのは、「事故を起こさない」ことだけを考えて作られたマニュアルに沿って、できるだけ事故のない環境を作り維持することであった。

その中にスタッフの思いや患者の可能性は含まれていない。看護とは本来ならば病状や治療、患者や家族のことなどを統合的に考えその人に合った看護が提供されるべきである。しかしそこでは患者の可能性や個別性の尊重は最小限に留められ、マニュアル重視の型に嵌め

込んだ看護が行われていた。事故を起こさないことにフォーカスが当てられて過ぎて本来の看護が置き去りにされている、とてもアンバランスな状態であった。

授業の中でとても印象に残ったのが「医療者の再教育をしっかりと欲しかった」という話である。起こってしまった事故に対し原因と対策を考え次に生かす。まさにインシデントの対策であるが、そこにはマニュアルを重視する声は全く出てこなかった。「薬品と消毒薬が区別しにくい状態で置かれていたことが問題で、それらをきちんと区別し間違いの無いように整備することが大切」という話がでてきた。そういった環境整備は当然大切であるし、救急カートの配置などはマニュアル化し統一することにより、全員が間違いなく使用することが出来るようになることは重要であるから、こういったマニュアルは必要である。

しかしほとんど全ての看護をマニュアルに置き換えて行う必要はあるのだろうか。医療従事者として働いていると、事故を起こさないための細心の注意を払うが、それでもヒューマンエラーというものは起こるものだ痛感している。経験を積んだ今だからこそ言えることかもしれないが、起こってしまったインシデントやアクシデントに真摯に向き合い、二度と起こさないよう対策を考えることは大切ではあるが、それら全てをマニュアル化しマニュアル通りに動くこととは違う。むしろ頭で考えながらその時々で事故の無いように動くことの方が大切ではないだろうか。

自分が勤務していたころは、漠然とした違和感という形でしかこの状況を理解していなかった。しかし今改めて振り返ってみると、本当に必要とされることがマニュアルにばかり置き換えられて、マニュアル通りに動くことばかりが重視されていることが違和感の原因であったと気付いた。

事故遺族の思いは、今も受け継がれ病院の中で生きている。しかし一方で、看護で大切なことが「事故を起こさない」という信念にとらわれ過ぎて、本来必要とされるべき看護から遠く離れてしまってもいた。もし在職中にこの矛盾に気付くことができたら、もう少し自分らしい看護を取り入れながらより良いケアを行うことが出来たのではないか。

今回の授業を通して、ずっと自分の中で未消化であったものを改めて考え直すことができ、本当に必要なことや求められていること、自分がどのように行動すべきかについて理解することができた。医療事故とは本来ならば絶対にあってはならないことであるから、今まで以上に注意を払いながら、本来の看護を忘れることなく医療に関わっていきたいと思う。